

第8回BOX展

展覧会委員会

開催日:2025年6月8-14日

会場:建築会館1階ギャラリー(東京・港区)

BOX展は、30cm立方の空間提案を公募し文化的創造につなげる、aacaならではの展覧会です。第8回となる今回は、建築・美術・工芸の境界を越えた素材・形状が自由な創作作品59点(会員23点、一般31点、学生5点)のご応募をいただきました。また会期中には250名を超える来場者がありました。

建築的視点も鑑みた本展は、会場構成に都市設計の考え方も取り入れました。展示台の配置、照明の位置、作品間の余白と動線の導き方など、視線と身体の動きを想定しながら計画。距離感を保ちつつも、互いに響き合うように作品を展示しました。様々な個性を発する作品それぞれが空間と対話を始め、展示台はまるで都市の街区のように空間を華やかに彩り、集合体としても一つの空間を形成しているように感じられました。

第8回展のテーマは、「夢があって、挑戦的で、思いが形に」。30cm立方という定められた空間の中で表現されたそれぞれの作品は一つとして同じ形はなく、石・漆喰・木・紙・金属・織布・うるしなど多様な素材を使い、その特性を駆使し豊かに表現されていました。糸から紡ぐ柔らかな風合いを活かしたり、ステンレスという固い素材を柔らかく表現したり、電気を使用したり、耐震構造をバネで作ったり。多岐にわたる夢のある作品にギャラリーは華やいていました。

初日に開催したギャラリートークでは、四国や関西からの出品者や学生、関東近在の多くの出品者が参加。自身の作品について、作品に込めた思想や意図、制作のプロセスを熱心に語る姿がとても印象的でした。光の取り込みを計算したうえでの立体構成する話、ある作品は表層で美学を語ろうとする試み、災害などの混沌とする世情に対する心象をもとに創作した話などを聴くことができました。皆さんの話からは、素材表現への挑戦だけではなく、空間構成を始めとした

既成概念への問い直しも感じられました。ギャラリートークで作者の声を聴く機会は、作品への更なる理解へとつながったのではないのでしょうか。

ギャラリートーク後には、建築会館の中庭にて懇親会を実施。広々とした屋外空間で場も盛り上がり、通常では接する機会がない会員同士の理解を深める貴重な場となりました。

最終日には表彰式を実施。米林雄一審査委員長から審査講評をいただいた後、東條会長から表彰状が授与されました。最優秀賞受賞の堤一彦様の「月を抱く種子」は、大理石を素材に種子の発芽を連想させる造形です。希望を感じ、とても美しい作品と審査で高評価を受けました。

本展は、委員会メンバーにとっても、素材と空間、空間と美学の関係を再考する場となりました。それは、建築の根源にあるものへの探究であり、美術工芸の精神と建築的知性が響き合う試みでもありました。また、出品をきっかけに、複数の方がaacaに入会されたことは、展覧

会委員として大変嬉しい出来事でした。

建築に関わる文化的な空間創造へと繋がるような作品を公募するBOX展が、回を重ねるごとに訪れる人々の記憶の中に息づき、芸術文化の発表を通して、社会の発展へとつながるべく、今後も尽力していきたいと思っています。

ご協賛をいただきました、大成建設株式会社、株式会社竹中工務店、株式会社三菱地所設計、株式会社大林組、株式会社佐藤総合計画、株式会社久米設計、株式会社エフワンエヌ、株式会社クサカベ、クラフト11、株式会社名村大成堂、光ステンド工房、株式会社文房堂には、厚く御礼申し上げますとともに、株式会社フッコーをはじめ運営にご協力、ご支援いただきました皆様に深謝申し上げます。

来年開催の第9回BOX展への準備はもう始まっています。多くの皆様のご応募を展覧会委員会一同、心よりお待ちしております。(副委員長 齋藤卯乃)

*出品作品の詳細や審査評などは、全会員に送付した『第8回BOX展作品集』でご覧いただけます。



堤一彦「月を抱く種子」



都市の街区をイメージした会場構成



表彰式参加者